

はじめに

「英作文」は「英借文」だと言われる。まさに言い得て妙である。外国語学習はものまねから始まるのであり、最初から独創的すぎる英文(例えば、文法・語順を無視した英文)は相手にされない。日本人は古代から、海外の文化を吸収し、それを加工してより良いものを作り出す技術に長けてきた。明治維新以後も西洋文明を徹底的に分析・解明し、語学の面でもほとんど全ての単語を日本語に翻訳し、日本でも専門的な学問ができることを可能にしたのである。裏を返せば、この時期に明治時代の天才たちが奮闘したために、後世の日本人は英語を使う必要がなくなり、英語が苦手になったとも言える。

従来の英語教育は、読解であれ作文であれ、^{ひながた}雛形となる公式を提示して、そこに単語を当てはめていくという指導法が主流であった。例えば「～のおかげで...ができるようになる」という表現は、～enable somebody to do ...という公式を覚えて、～や...のところに様々な単語を当てはめて英文を作り上げていくのである。もちろん、初期のうちはこの学習法は欠かせない。問題は、巷の英作文の参考書等はこうした公式をただ羅列するだけに終始していることである。こうした公式の個数を増やすことが、英作文力向上につながることは否定しないが、中にはhardly ~ when ...やbut for ~のような、ネイティブスピーカーでも今ではまず使わないような表現まで列せられていることだ。いまひとつの問題は、公式に単語を当てはめていくといっても、数学の公式に数字を当てはめていくのとは違い、単語1つ1つには皆それぞれの使い方やニュアンスがあり、そう単純なパズルゲームではないという点にある。

そこで、本書では、伝統的英作文教育の良い点を受け継ぎつつも、その次のステップにつなげるところまでを示したつもりである。すなわち、全体を2部構成にして、第1部では最低限おさえておきたい文法項目と構文のパターンの習得を、第2部ではそれらの知識を使いつつも、基本語彙を使って難しいことを表現する応用力、基本語彙の語法やニュアンスの習得、そして口語体と文語体の意識などを指導していく。この両者を体得してはじめて英作文のゆるぎない力が養成されるものと確信している。本書を通じて一人でも多くの学習者の英作文向上に貢献できればと思っている。

2010年12月

小倉 弘